

淨土

1980-9

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回、一日発行
昭和二十四年四月二十八日 連載省 (特別授承認雜誌) 第三十五号
昭和五十五年八月二十五日印刷 昭和五十五年九月一日発行
第四十六卷 第九号



青い目の留学生

本年四月中旬より七月中旬迄の三カ月、オーストラリアの交換学生をお送りしました。名前はクリステイ・ライダーで、藤沢市鶴沼にある湘南学園（私立）にかよう高校二年生のお嬢さんであります。



—着物姿のクリス嬢—

本年は、オーストラリア各地より八十名の男女の高校生を日本各地のロータリークラブがお預りしています。また交換学生をあずかっているロータリークラブでは、必ずオーストラリアに交換学生を送っております。日本

からも八十名の男女の高校生がオーストラリア各地に行っております。鎌倉ロータリークラブも、県立逗子高校の女子学生が試験に合格したのでホストして送っております。我々のクラブは、クリス嬢を四家庭で一年お預りすることになりました。

オーストラリアの学校は、一月から十二月迄が一年の学期だそうで、したがって留学生は一月に日本に来ます。そして三カ月、各地区で日本語の勉強をし、四月より日本の高校

に通学することになります。

ロータリーは色々な職業人のあつまつた社会奉仕の団体ですので、いろいろな職業の家庭で生活するので、色々な経験をつむと思います。なるべく同年代の子供のいる家庭があずかるようにしています。私共のあずかったクリス嬢は、非常に明朗な性格のお嬢さんで、とくに日本文化に感心が深く茶道、書道、盆石等に変な興味があり、またき用であり、上手です。とくに、鎌倉の御寺詣りなど大好きです。生活は畳の生活が好きで食事等是我々と同じ日本食で、高校にも家の子供と同じ弁当をもって通っていました。納豆、おみそしる、寿司等なんでも食べ、御飯もおかわりして食べました。そして日本の着物を喜んできて、日本の生活に対して、意欲的にとりこんでいます。また朝早く起こしてくれといい、朝の勤行にもつきあいました。このように日本の生活を通して、日本人を理解してくれる外国人が一人でもふえと思うと、この努力はつげなければなりません。

（佐藤行信）

九 月 号



至誠心とはこれ眞實の心なり。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集 1 P.127)

目 次

人間法然に学ぶ親子の愛……………大 室 了 皓…………(2)

◇想い出のページ (『浄土』創刊号より抜粋)

法然上人への思慕……………岡 本 かの子 ……(12)

詩二題……………佐藤春夫・朝倉文夫 ……(16)

(連)(載)(法)(話) 第一回

洗心去疾……………小布施 弘 学…………(7)

真向きの仏画像……………磯 貝 基 教…………(26)

〈連載〉

一つの道(三)

一わが教えの子のこと……………戸 川 霊 俊 ……(18)

絆(きずな)【四】

——栄光の青春・失意の青春——……………森 邦 夫…………(30)

浄土句集……………一 田 牛 畝 選…………(24)

〈表紙のことは〉ひがんばな……………土 屋 正 男…………(23)

〈表紙裏・巻頭言〉青い目の留学生……………佐 藤 行 信

念仏ひじり三国志の——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉…………(36)

表紙 土屋正男画

カット 大正大学美術部



人間法然に学ぶ親子の愛

おおむろりようこう
大室了皓

(東京・上大崎光取寺住職)

は……」

一、勢至丸の出家

法然は勢至丸といわれた幼年わずか九歳の時に、父の死に遭う。

御伝によれば、死にのぞんで父の時間は我が子勢至丸に、

「汝さらに会稽の恥を思い、敵人をうらむることなかれ。これ偏に先世の宿業なり。もし遺恨をむすばば、そのあだ世々につきがたかるべし。しかしはやく俗をのがれ家を出て我菩提をとぶらひ、みづからの解脱を求めんに

と諭し、端座して西にむかひ、合掌して仏を念じ、眼るがごとくに息絶えた。

勢至丸は父の遺言に従って、叔父観覺得業の菩提寺に入った、という。

突如として敵が襲いかかる夜討のさなか、おそらく下女たちは怖れおのき逃げまわったであろうその混乱の中で、僅か九歳——小学校でいえば四年生——の少年が逃げるどころか、敵に立ち向って矢を射ったという。

今の子供とは較べることはできないが、ずば抜けた気性の少年である。

しかし物の分別もつかない子供である。

仇討は当時の常識であって、それは子の宿命でもある。激しい気性の子供に、「それを止めよ」という父の言葉が、はたして通じるであらうか。

また僅か九歳の子供に、「父の菩提をとむらうと共に、お前自身の解脱を求めよ」という言葉がわかるだろうか。

御伝はそう述べているが、多分に美化したものであらう。

定明は、勢至丸も殺す積りであった。後顧の憂いをなくすためには当然のことである。それを討ちもらしたのである。

このことは、父の時国も十分に解っていた。大勢いる子供ではない。神仏に祈って授かった、たった一人の可愛い、子供である。彼の愛には一方ならぬものがあつたらう。

わが亡きあと、定明は再び襲ってくる。我が子の命は風前の灯である。

父はこう論したに違いない。

「仇討のお前の気持はよく解るが、あすにも定明がやって来るぞ。早く逃げよ。家など捨ててもよい。命が危いのだ。わかったか。逃げるんだぞ」

普通の親なら、「無念であるぞ。この恨みを」というのであらうが、神仏によって授かった大切な子供である。仇討の気持もあつたかもしれないが、先づ生きながらえてほしい。そういう深い親心があつたのではなかつたらうか。

上司をあなどって、呼び出しにも応ぜず、命令にも従わなかつた。

——都からやって来て、土地に不案内にもかかわらず、威をかりて命に服させようとする暴挙には応じられない。土着の時国には、そういう反感があつたのかもしれないが——

その報いで夜討をかけられた。いわば己の不徳が、愛する妻子を不幸の奈落におとすことになった。

それなのに、どうして仇討などさせられようか。

時国は三宝に帰依する心が篤かったというから、こういう心にもなったろう。

時国夫妻が子授けを祈ったという本山寺が近くにあるのに、なぜ四十キロも離れた山中の菩提寺に行ったのだろうか。叔父がいるという理由だけでは理解に苦しむ。

夫を一夜にして亡くした上に、容易に会いに行くこともできぬ山奥へ子供を入れなければならなかった。

それは、実は逃がしたのだ。

御伝のいうところは、ありがちな伝記作家のなせるものである。

そう考えると、人間としての時国親子のことが理解できる。またそれが自然の情でもあらう。

しかしこのことは、決して法然を傷つけるものではない。人間的な教えであるが故に、浄土の法門は尊く、人々の心をとらえて来たのである。

時国の我が子と思う純粋な親の愛、私はそれが尊いと思うのである。

親の虚栄を満たすために子供を育てている親たちが、いま溢れている。どれほど多くの子供たちがその犠牲になっていることか。長年、教育界にあってその実態をまざまざと見せられてきたが故に、特に痛感するのである。

この愛こそが、勢至丸をして法然たらしめたことを教えられるのである。

二、求 道

横井庄一氏や小野田寛朗氏のことは、まだ記憶に新しい。

マニラの比国空軍基地の中に、小野田氏の

当時の日用品や武器などが展示されている。彼は比国でも英雄である。

法然は十五歳で入山、四十三歳開宗であるから、二十五年に亘る大修行である。その間、嵯峨・南都などに脚を運んだことはあったが、ほんの僅かの日々であったことを考えると、とても常人の真似できるものではない。

畳の床も一年しかもたないという悪条件の山中に、二十五年とは、横井氏らにも劣らない非凡のわざである。

法然をして、青春の全てをこの驚くべき修行にかり立てたものは何であったのか。

御伝にいう。

「われ浄土宗をたつる心は、凡夫の報土にむきることをしめこんがためなり」

このために長い求道生活を送ったということであるけれども、その底にあるもの、そ

う心をかき立てたものは何であったのか。

「三学の器」にあらざる自分が救われる道のないことを、「なげき、なげき……」苦しんだのであろうか。

法然は九歳にして母と別れてから、共に暮したことはないようだ。子を案ずる母の心はさぞ深いものであったろう。

入洛に当って御伝には、

「……再三なぐさめ申す。母堂ことはりにおれて、承諾の詞をのぶといへども、袖にあまかなしみの涙、小児のくろかみをうるほす」

と。

この文を読むと、戦争中の少年航空兵を思い出す。

敵の手を逃れて入山したが、観覚と共に過した六年間に彼の心は求道へと傾いて行った。余人と全く交わることでできない山寺での、観覚だけを頼りに過した少年の心は、観

覺によって動かされて行つた。

母を泣かせて入隊した少年兵のように、彼も母を泣かせて上洛した。しかしその母は僅か一年後に三十七歳で若い命を終えている。

「立派な人になって、世のためになる人になつてきます」

そう誓つて出立したのであろう法然の悲しみはどれほどであつたろうか。

自分を抱いて別れを惜しんだ母。

「どうしてもお前は行くという。もう留めることは出来ない……」

彼女は歌に托した。

かたみとはかなきおやのとどめてし
この別れさへ又いかにせん

稚拙な故にこそ、母秦氏のものであると信

じたい。時国はあれほど美化しているのに、どうして母は凡婦として御伝は描いているのだらうか。それだけに真実として迫る。

とにかく法然は夢い母を思い、幾度も涙を流したことであらう。

この母を地獄におとしはならない。浄土へ行かせてあげたい(凡夫往生)。

そして非業の死をとげた父も。

親子の縁が薄かつただけに、なつかしい親を慕う心は特に深かつた筈だ。

それが、二十五年にも亘る修行の原動力になった、と思うのである。

子を思うひたすらな親心
親を慕う純なる子的心

これが浄土開宗となり、国を大きく変える
もとなつた。

そういう気がしてならない。



連載法話 第一回

洗心去疾

小布施 弘学
(長野市長明寺住職)

なく内外共に淨からしめ給え”

と。

この薬師の湯に入る人々に、体の保養のためばかりでなく、罪濁垢穢の心も合せて洗ひ清め、身心の病み煩いを治すように教えている。

私は前後三カ年、大学病院に入院中、生死を迷うような手術を二度も受けたが、幸ひ仏力加護のもと、衆縁

”洗心去疾（心洗わば疾去る）”——これは信徒宿泊施設として「薬師会館」を建てた時、浄土門主、岸信宏親

下より、お祝いに頂いた、ご尊筆である。

沐浴偈に、

「洗浴身体 常願衆生 身心無垢 内外清淨」

”この美しき湯浴み、もろ人と共に、身と心けがれ

の恩寵によって命拾いをする事が出来た。

私の「オペ」をしてくれた教授は、回診のとき、

「病氣は医者や薬が治すのではない。病人自身が病氣を治すのであって、医者とはそれを手伝うわけである」

と語った。

確かに、どんな名医の診察を受けても、また、高価な薬を使用しても、病人自身が、

「病氣に負けまい、必ず生き抜こう」

という心を持たなかったら、病氣を全快させることは不可能である。

私達人間の体には、自然良能力（自己修復能力）があって、体の一部が病氣になると、肉体の全機能をあげて、治そう治そうと活動をするのである。切傷をすれば、直ぐ透明な膜が^{きく}生じて血の流出を止め、ばい菌の侵入を防ぐのをみても明白である。また、異物をのみこむと、強

い拒否反応を示して、それを体外に押し出そうと懸命である。

だから、肉体のこの良能力に合わせて、病人も、治ろう治ろうと、心を強く働かさなければ、肉体ばかりに、病いの負担がかかって、治る病氣でも駄目になってしまうこともある。早く全快するものが、なかなか治りにくくなってしまうこともある。

しかしながら、病氣になれば、人間の心も弱氣になってしまい勝ちである。そこで信仰が必要になってくる。

病氣になったら医師に全面的信頼を寄せ、徒らに病いにとらわれて狼狽^{うろた}することなく、病人になり切ることが肝要である。

ある医師は、私に、

「われわれ医者の先生は、大学時代の教授でもなく、医学書でもない。医者の先生は、いま目の前のベットに横たわっている患者である」

と語った。

この謙虚な態度にふれたとき、患者は、自分の生命を

まかせようと決意し、大きな安らぎを覚えるのである。

釈迦は、ある日、弟子達をつれて伝道教化の途中、菩提樹の木蔭に涼をとったのである。その時、釈迦は、静かに語られた。

“身はこれ菩提樹、心はこれ明鏡台の如し、時々拭しよくにつとめて、塵埃じんあいをして、なつかしむること勿れ”

と。

生きとし生ける万物の中に、人間の生命をもつて生まれたことは、なんと素晴らしいことではないか。それは数え切れない程ある樹木のなかで、王といわれる菩提樹のようなものである。そして人間の心は、元来、曇りもゆがみもない明るい鏡のようなものであるが、常に煩惱によって、汚れ勝ちになるから、時々心の塵埃を、払い清めなければならぬと、訓されたのである。

“一切衆生悉有仏性”——一切の衆生は、悉く仏性を有しておるのであるから、それを先ず自覚し、仏性を開發かふしていかなければならない。我々は煩惱にとざされて、貴重な仏性を顕現せずには終ってはならない。

上述の如く、人間の体には、自然良能力があつて、病害を排除して、健康に戻ろうと活動しているが、それと同様に我々の心にも、自然良知力があつて“本来の性”に立ちかえつて、立派な人間になろうと努力しているものなのである。

この心を、一層旺盛ならしめていくものが、信仰の役割である。

しかし、道元禪師の、

掃けば散り、払へばまたもちりつもる

人の心も庭の落葉も

の歌のように、悲しい哉、我々人間には、無始の慣習である煩惱を所有しているため、“止悪行善”の心が、それにさまたげられて、不覚を道を歩んでしまうものである。

人の心自体は“善悪無記”であり、“善悪無主”であるから、本来、無でもなく、悪でもない。この心を、善に向けしめていくものが仏性であり、悪に走らせてしまふのが煩惱である。

我々が信仰に無関心な態度をとっていると、心のなかの自然良知力（仏性の働き）が、弱くなると共に、煩惱性が力を増して、人の心をむしろいくだのである。だから、常に信仰することを怠らないと、仏性がいよいよ開發され、煩惱性が心の隅に寄せられて、力が弱まってくるのである。煩惱にとつて、最も恐ろしい敵は仏性である。即ち信仰に励むことによつて、煩惱が骨ぬきにされていくのである。このことを意識して、仏性を増大させることが大切である。

今日、科学万能と現実主義の思想が異常に発達して、人間の心をおろそかにしている。

その結果、教育が、高度の知識と優れた技術を身につけさせる職業教育に墮してしまつてゐることは誠に遺憾である。

本来教育というものは、立派な人間をつくること为目标でなければならぬ筈である。

自分の職業に生き甲斐をもち、その仕事自体が、人間形成への道に通じていなければならぬ。即ち、生きることに、そのまま立派な人間になるための修業であることと自覚することが肝要である。これが、万物の靈長といわ

れる人間の正しい生き方なのである。そして、おのれの働きが、少しでも世のため、人のために、貢献し、影響していることに、充足感が持てなければならない。

この考えが、仏説の「願共諸衆生」——願わやば、諸々の衆生と共に生きん、という思想である。我々は一人生きていけるものでなく、相互関係によつて生かされていくものであると意識することが、心ある人の姿である。

耳ざわりのよいマイホームの風潮が、親子や老若の間に断絶をもたらし、核家族によつて自己の利益と幸せのみを追究することになつてしまひ、真に助け合つていかなければならない人間同志が、いよいよ冷淡になつていく人間砂漠の現状である。物質的に豊かなベツトの上で、横たわつてゐる日本人の心は、救いようのない病気にさいなまれてゐると、外国人は批判してゐる。そして、物を造ることが巧みでも、心をつくることが下手で、楽しむことを知つていても、真の喜びを知らず、脳があつても、心のゆとりを見出せず、ただ、忙しく働き廻つて、身心共に疲れ果てて、人間の帰趨に無頓着になつてしまつてゐるのである。

釈迦は、戒経のなかで、「徒に疲労すること勿れ」と警告しておられる。

我々は体が健康であつたら、生涯働くことは当然であるが、努めて「ゆとり」の時と処をつくつて静かに思考することが、人間の生きるべき上に必要な条件である。体ばかり丈夫でも、心がわずらつてしまつたら大変である。

自然良知力が、絶えず、よき人になろうと活動しているのだから、それに合せて、正しい信仰を實踐するならば、我々の仏性が益々開發されて、理想的人格（仏）に近づくことが出来るのである。

法然上人は「信は力なり」と云われたが、「南無阿彌陀仏」と称名相續することが、苦悩を乗り越えて雄々しく生きる道である。

念仏者には常に仏の力が加えられていることを意識し、仏凡一如の境地を悦ばなければならない。

ありがたや仏おろがむわれは今
しばし仏になりぬ姿ぞ

|| 新刊 ||

総本山知恩院
大本山増上寺
大本山善光寺大本願
布教師 小布施弘学著

『伝統の変容と進化』

— 仏教的視点より現代人への提言 —

○難解な仏教の教えを、新しいセンスで分りやすく説いた待望の布教書。篤実なる伝道者小布施師の名調子が、一気呵成な筆致で展開される。
すでに三版を重ねて、好評発売中。

B 6判 二四〇頁 価一五〇〇円
(一六〇円)

(申し込み先)

〒 381-12
長野市松代町東寺尾三八八一

長 明 寺
振替（長野） 一四三二二

◇◇◇ 想い出のページ ◇◇◇

『浄土』五月創刊号(第一卷第一号)より抜萃

来る十一月八日(土)に、東京・田町笹川記念会館で行われる法然上人讃仰会創立四十五周年の記念式典に併わせて、今号は、昭和十一年五月一日に発刊された『浄土』誌第一巻創刊号から想い出のページを開いてみた。創刊当時の懐しい目次を眺めながら、女流作家岡本かの子の執筆に満ちた一文と、作家佐藤春夫と詩人朝倉文夫の二篇の詩を再録させていただいた。

法然上人への思慕



岡^{おか}
本^{もと}
かの子

私は近頃、紫式部の信仰を調べる必要があつて平安朝の浄土思想を探つてみた。この偉大な女流文学者は、晩年阿弥陀仏の信仰により安心立命を得て西方往生を期した。その事は式部自体、日記の中に記してあるから間違ひはなく、且、晩年のみならずずっと前から浄土思想に深く涵養（かんよう）されるところがあつたために、あの絶妙な芸術的情緒が潤はされたであらうことも亦、想到するに難くはない。

ところで式部の信仰の環境をなす当時の仏教界の有様をみると思ひの外に浄土教の勢力が強い。しかし其の勢力の強さといふものは形式的や教権的でなく、実質的、内容的である。

つまり日常生活の利益や靈驗は他教によって需（もと）めるが、いざ生死といふ人生の根本問題に触れて来ると多く弥陀の西方浄土を念ずるといふ有様だった。それ故今から見ると随分妙に思はれる信仰様式が行はれてゐた。例へば法華經を受持する功德によって弥陀の浄土を期するとか、或は釈迦、薬師の造像起立の報應によって極樂往生を適（かな）へさして貰ふとか、およそ筋違ひ、矛盾に感ぜられることが、普通に行はれてゐたやうだつ

た。つまり専修の念仏でなかった。さういふ雑修的なやり方でも兎に角、弥陀憧憬の風は滔々として人々の精神界に流れ、世に時めく儀礼仏法、社交仏法の影を避けて、真摯な花を咲かせてゐた。

当時「聖（ひじり）」と称される一群の遁世者があり、遁世する事を「聖（ひじり）」といふ流行語が出来た程で、世人から羨望の眼を以つて見られてゐたのは心の趣くままに法の真摯な花が培（やしな）へる境遇だったからである。しかしそういふ聖たちでも雑修の風は同じ事で、これはもう少し後の事ではあるが、「棚原聖（たなはらひじり）」といふ人の如きは經典も誦せず仏号も唱へず、ただ西に向つて方丈に坐つて居る、それが極樂往生の近道だとするやうな變つたのがあつた。

平安初期以来、浄土教は内容的にそれほど人々の心に強く流れた大きな川であつたとは言へ、その信仰は上述の如き雑修の混濁を帯び、かつ、いくつかの宗派に分れて煩瑣、疏荒（そこう）に堪えなかつた。それを念仏一行、口誦専修の河容（かよう）に改渫（かいせつ）、統一せ

られた法然上人の宗教的力量は推し測られないほど偉大なものである。

私たちは上人の乗訓を読み、余りにしばしば口を極めて雑修の排除に努められてゐるのをみて、これ程にせられずともと思ふことがある。しかし、これは浄土思想と念仏との関係が既に整理し尽され、殆ど自明の理（ことわり）の如き形にして与へられてゐる。今時の私達が感ずる感想であつて、上人時代、既往三百余年の雑修の因修の深さの前に立つならば此の感は絶対に起らないであらう。実に當時に於て此の事業をせられたのは、大河の流れを一臂（いっぴ）の力に依つて決せられたやうな大努力であつたのである。私は平安朝の浄土教の状態を知るに及んでつくづく上人の思想的勇姿を思い泛（うか）べた。

次に私が法然上人に感謝してゐることは、上人の迷ひの間が長く思想を定められて立宗開教せられたのは、早熟早老の習慣があつた當時に於ては、寧ろ老年に数へらるる四十歳以上の時であつたことである。上人は長寿で

八十歳以上までも在世され立宗開教以來、普通人の一生涯に価する歳月を用ゐられて、あれだけの救世済民をせられたのであるが、若しも上人にして日本人の平均年齢ほどで示寂されたなら甚だ心元ないものがあつたであらう。長寿それ自体、上人の大器晩成を証するものであるが、上人が幼時から慧悟（けいご）、天才型の方でありながら、而かも四十過ぎまで宗教的求道搜索に彷徨せられたといふ事は、如何にその志が高く、いい加減のもので満足せられない性質であつたことを証する。真の意味の大器晩成型であられた。これにつけて自分の事を言ふのはおかしいやうだけれども、私も宗教に歩みを入れたから、真の安心立命を得られず、あれやこれやと随分右往左往した。その為め意外な広さを漁つたことは望外の僥倖（ぎやうこう）であるが、しかしさすらひは辛（つら）いものである。まして、精神的生命の死活問題に係（か）かる「さすらひ」は骨身にこたへる。私は歎きのあまり、自暴自棄に陥らうとし、懷疑の谷にうづくまり宗教を白眼視しやうとした事さへあつた。そういうときに慰められたのは法然上人の決定（けつじょう）の遅かつた事である。（余の大宗教家の決定は多く二十代、三十代であつ

た。

「上人如き慧悟の方にして四十以上まで選択に時日を費された。まして、まだ若く且つ拙い自分である。努むべきである」と、私は思った。

かういふ意味で感謝されたいふ事を若し上人が聴かれたなら、恐らく苦笑され憫笑(びんしょう)されるであらう。しかし、事実私は此の点でどのくらゐ慰められたか知れない。しかも今、私は何人にも早く安心決定して上人の斯る点に慰められずに、もっと上人の本筋の宗教的なものに慰められん事を祈って止まない。

上人が宗教家として中(うち)に鋭く勁(つよ)いものを藏しながら人間としての手触(てざわ)りが春の海の如く寛(くつろ)いで、びやかなのは、私(わたし)が他(ほか)でしばしば述べたところである。気品(きひん)があつて美的情操(びでいさく)の豊(ゆたか)であつたことは詠(よめ)ぜられた和歌によつても判(わか)るが、上人の文(ぶん)そのものが既に一個の平明な散文詩である。私はごく卑近(ひじん)な世俗的(せきじく)の疑(ぎ)ひの問(と)ひに對(たい)し、同じく卑近(ひじん)な列(れつ)に降(くだ)つて通俗(とふし)に答(こた)へられてゐる上人の問答体(もんたふたい)のものに

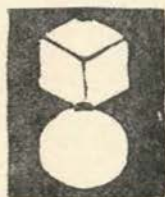
却(かへ)つて驚(おどろ)くべき雄勁(ゆうけい)で艶美(えんび)な詩のリズムを發見(はっけん)して讀嘆措(お)く能(あた)うはないのである。淳美(じゅんび)の人は何物(なにもの)をも醇化(じゅんか)せずには措(あた)かない。

私は善き意味(いみ)の厭世感(えんせいかん)は現実生活(げんじつせいかつ)の墮落(だらく)を批判(ひはん)し、思想(しゆさう)の低劣(ていじやく)を排除(へいじやく)して、良好(りやうこう)の思想(しゆさう)を迎(むか)へ入れる精神的準備(じゆんしき)工作(くわく)をなすものと思(おも)っている。勿論(もちろん)、上人の宗教(しゆきう)は一方(いつぱう)、光明主義(くわうめいしゆぎ)ではあるが、一方(いつぱう)かなり此(こ)の準備(じゆんしき)工作(くわく)にも力(ちから)を入れられてゐる。今日(こんにち)、上人の光明方面(くわうめいへん)と共に、後者(こうしや)の方面(へん)にも學ぶべきものが多々あるやうに思(おも)ふ。

上人の行業(ぎやうごう)積(つ)むにつれ、三昧(さんまい)を發得(はつとく)せられ、宝樹(ほうじゆ)、宝池(ほうち)を、眼前(がんぜん)に眺(なが)められ、大地(だいち)は瑠璃(るり)に化(くわ)して眺(なが)められたと伝記(でんき)に書いてある。この事は別に信心獲得(しんしんかくとく)に直接關係(けんがひ)なく、或(ある)は伝記者(でんきしや)の迷信(めいしん)とする人が在(あ)るかも知れないが、私は素直(すぢ)に享(う)け入れ度(ど)と思(おも)ふ。要するに心、清淨(じやうじやう)を得(え)た人は現實(げんじつ)をも美化(びか)して眺(なが)められる。否(いな)、現實(げんじつ)は本質的(ほんしつてき)に真(ま)にして美(み)なのかも知れない。それは兎(う)に角(かく)、いやしくも淨土思想(じやうどしゆさう)を愛(あい)するものは、その要素(ようそ)の一つになつて居る美(み)の価値(かち)、憧憬(けいけい)の価値(かち)にも重要な注意(ちうい)を払(はら)ふべきものと思(おも)ふ。

詩 一 つ

うらやましきは人ならず
西方の宝池にありて
あそびてふ鴛鴦なれや
鳥の身もうへ
妙法をぞ説けりける
南無阿弥陀仏



佐^さ
藤^{とう}
春^{はる}
夫^お

笑つてゐる魚



朝あさ
倉くら
文ふみ
夫お

私は釣りが好きでよく出かけますが、決して怒つてゐる魚は釣りません。笑つてゐる魚ばかり釣つて来るのです。無理をしないで釣り上げた魚は笑つてゐますが。無理をして釣つた魚は怒つてゐます。さういふ魚を釣る人は釣道の邪道ですな。何処で解るかつて？ それは魚の表情にちやんとあらはれてゐます。

一つの道(三)

—わが教え子のこと—



戸川 霊俊

(京都市・黒谷西住院住職)

人生は出会いと別れる連続であると或るものは云う。私にとって別れというものはない。過去の出会いは記憶として、未だ経験せぬ出会いは期待として、私の現実に生きている。

人生とは出会いにつぐ出会いの積み重ねがあると思う。出会いこそ、人生そのものではないであろうか。

浄土宗のお寺の古い檀信徒の旧家に生れ、寺から絶えず届けられる宗門の書物類にも、そっと眼を通す位の機会を少女の頃から持ちながら、特別に宗教らしいもののへの関心も抱かず、たまたま大学に進んだ日、浄土宗の宗

侶である私との出会いが契機となり、彼女なりに仏道を歩みつづけて究極に日蓮聖人の門に開眼していった、この一筋の道。

わたくしとの出会いが、どのように彼女に影響を与えたとしても彼女の道は彼女の道であり、彼女自らの選びとった道である。わたくしの道は、また私自身の絶対の道である。

人は人 吾は吾なり とにかくに

吾が行く道を吾は行くなり

西田幾太郎先生のご感懐のように、哲学のみち、宗教のみち——人生の道それ自体が畢竟どこまでも、吾自身の道であって、他から与えられた道でない。

妙鳳尼が、日蓮聖人の妙法の教えに自らの眼が目覚めて撰択したその道は尊い。

そのことを知りながら、信じながら、私は私と妙鳳尼との出会いの意味を、ちっと、考えてみる——。

浄土教の末輩であっても、私には、彼女に影響を及ぼし得るような、法華經的な、日蓮聖人的な——こんな表現が許るされるならば——匂いは、教学としても、信仰としても微塵も無い。私自身の日蓮聖人への理解は、貧しい知識として、若き日に高山樗牛の書を介して、姉崎正治博士の「法華經の行者日蓮」を通しての程度にしか過ぎない。それはそれでまた、自分ながらよろしいと思う。

私は、自分の道の来し方^{かえ}をふりかえてみて、ふと或る師との出会いに思い当るのである。運命論者でないけれども、私には、冥々たる境裡に、その出会いというものを介して、彼女妙鳳尼に日蓮聖人の教へが生れてきた

のではないかとおしはかる。

京都に帰ってからの学窓で、私は哲学科の中で、印度哲学史専攻を求めることとなる。その時に出会ったのが主任教授本田義英先生であった。フランス留学を了えられ、求められて竜谷大学から転じられた頃と思う。

本田先生は、奇しくも日蓮宗京都深草宝塔寺のご住職であられた。奇しくもというのは、いま妙顯寺本山で修行する多田妙鳳尼が法儀宗典を身自ら以て教えを乞うている師が、この宝塔寺の寺庭に育てられた法師であるからである。

先生は、仏教やインド哲学は元より、その宗の宗典の研究の門に入る前にも、何よりも言語の勉強を、巴利語・梵語の勉強を厳しく求められたことを想う。

先生にあっては、その学問と、そのご宗旨の信仰とが紙一重の隙き間もなく一致していたと思われる。

晩年のご著作「法華經新訳要集」は、いうまでもなく世界的な学的労作であるけれども、これは先生の日蓮上人の教えのひたすらな愛宗護法の結晶とも受けとれるのである。

総本山身延山久遠寺の祖師堂のみに、先生御夫妻ご

寄進の銘の献塔も祖師への孝養報恩のあらわれと、末信末学の私に教えられたところの印象は深い。先生は單なる学究でなかった感が深い。はじめて教室でお出会ひした時の、一見禅僧と見まがう風貌が今も尚印象として残る私にとって、先生は、また護法精神丸出しの頑固な日蓮僧ではなかった。

私が浄土宗であると知られると、「前田君がねえ」と思い出を語られる。前田君とは——二高、京大を通じての親友、わが宗（大阪天王寺区一心寺）の前田聴瑞老師のことである。

私が岡崎の住であることを聞かれると、「宮城君がねえ——」と、これ又なつかしげである。宮城君とは——前田老師と同様に、旧制高校、京大を通じての親友であられた聖護院改修院の宮城信雅老師（「園城寺の研究」の著者・元三井寺天台宗寺門派教学部長）のこと。

たまの座談の席で、前田君を語り、宮城君を思い、時には同学の私の知れる宗門の人達を偲ばれる時の先生の温顔は、ひとしほ「良き友」に恵まれた人生の幸せに、心からほのぼのと酔ひひたっていられるかの感があつた。学窓の日に結ばれた「良き師・良き友」の幸せは、

今も昔も何ものにも代え難いことを、しみじみと思うのである。

聴瑞先生が山鼻姓から、その師前田聴典師の養子となられ師跡の名利を次ぎ次ぎと継がれ、義英先生も桐山姓から、その師本田日周師の養子となられ深草宝塔寺を董され、互いに恵まれた各々の境遇のうちに、悠々と学の研鑽に取り組んでゆかれたお互いを意識しておられたかどうか。

ただなる学人としてのみでなく、銘々得度のその宗の精神に信仰の火を燃やされた日蓮宗人として、浄土宗人としての両先生の明治の友情を羨しくも思う。

義英先生がお亡くなりになったのが昭和二十八年、この畏友の訃音が動機となつて執筆された聴瑞先生の「発願文私記」こそは、数ある善導大師に関する斯種の注釈の中で千古に絶する名文であると私は思うのである。

その頃の西田哲学に続く田辺哲学、波多野宗教哲学、和辻倫理学のような希臘的思考の講壇派学風の漲る雰囲気、殊にデンマークの哲人キェルケゴールに、年少の日からデンマーク語で親炙していた一人の友の学的刺激というか学的誘いに強くいざなわれて、随觀察

(アーヌイターシキ)の哲学から、愛智(フィロソフィア)の哲学に心を転じていった私は、自然と先生をたよりとするインド哲学をなをさりにする結果となった。でも、後年になっても先生は、そのことについて一言も訊されるようなことはなかった。今も私の書棚に「仏典の内相と外相」「法華経論」が、じっと私を見つめている。時には厳しく、時には優しく。

しかし、人生のひととき、この法華経の碩学と出会ったということは、私にとって、ひそやかに、心の奥く、先生の人格を通じて日蓮聖人の教えに、ふれさせて頂いたことになりはしないか。

さきの戦時中、私は宝塔寺に先生を訪れた。祖師堂というか、書院というか、今ははっきり記憶に浮ばないが、全建物は陸軍病院の臨時病舎として貸し与えられ、祖師前を覆うて日の丸の大国旗がかかげられていたのを想い浮べる。

「先生——」

思わず私。

「これでいいのだ」

無言で頷かれる。

祖国の難局下、教えられるところ意味深いあるべき仏者の態度。先生はそういう方であった。

初夏の、さる日五重御礼のため祖山に登嶺する。

門主室に高島寛我猊下にお目にかかる。私を見て、「よく肥られた。すっかりした躰格ですなえ」と仰る。私は若い頃から瘦身であったが、いつご覧になったのであろう。猊下にこの前お出会いしたのは、祖山の開八記念大法要で、猊下が大導師、私が左導師で名誉にもご一緒させて頂いた頃。そして、遠く大正の末ころ高島先生——猊下と呼ばせていただくより私にはこう呼ばせて頂くのがふさわしい——のフランスご留学を井川定慶大先輩のお指図で京都駅頭にお見送りし、この時、大先輩から紹介されてご挨拶した思い出がある位である。このことを申し上げると、「そうでしたか。有難う」——もうすでに半世紀も過ぎた今、忘れて去っておられたのであろう。或いは微かに記憶されて下さったのであろうか。

「梵文の榊亮三郎先生は厳しい方でね」——大島徹水僧正から「あの厳しい榊教授の下で勤まるのだから、高島というのは余程の人物だ」と聞かされたのが思い出に浮

ぶ。高畠先生は、当時、梵文学の講師であられた。

「禪宗の原真乗という坊さんが居られた」と回想を続けられる。原真乗というのは東福寺派のご住職で、高畠先生と並んで梵文学の講師でもあった。

卒歳を迎えられる貌下をうかがっていると、いま在世ならば丁度同じご年輩のインド哲学の旧師のことどもが

追想されてくる。

かすかに残る日蓮の碩学の私への縁が、わが教え子妙鳳尼に一筋の糸となって連りゆかんことを切に希うのである。

(了)

◎『浄土』表紙版画販売についての「案内」

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、土屋正男先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20 cm × 30 cm 位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30 cm × 50 cm 程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。

(申し込み先) 千102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振 替 (東京) 八―八二二八七

表紙のことば

「ひがんばん」

この花は鮮孔の繖形花序で一見華やかな姿であるがそれでいてどこかさみしい花である。なぜだろうか。

道端の、それも人のあまり通らぬ山裾とか墓地脇、堤や川岸などに多く見かけるからだろうか。それとも子供の頃、毒草であると教えられ死人花、幽霊花などと呼んでいたからだろうか。

強い秋陽のもとで、ひと気のない木翳りを背に、一叢鮮やかに咲いている風景は一種の凄ごみをまじえた妖しさを感じる。以前そんな群れ咲いていた場所が無残に荒らされた跡に出遭ったことがあった。たぶんこの花を嫌った誰かがやった仕業だろうが、その時に

土屋 正男

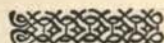
フト狐か物怪ものけが今のさきまで其所で戯れていたのであるまいかと思ったことだった。

不思議なことにこの花は、秋の彼岸頃に必ず時を合せて緑色の一茎を延ばす。頂頭に輪状の一斉に花咲かせてまた一斉に消えていく。曼珠沙華びざんざわといひ彼岸花ひがんばなというのも仏教めいた名前であるけれど、仏様との関係ある伝説などないものなのだろうか。そういえばこの花の色かたちからはインドサラサを連想する。

花時に葉をみない葉は、冬の頃水仙のような葉を簇生して春の頃には枯れてしまう。花は葉をみず葉は花を見ないので、はみずはななみずともいうと。

この花がさみしいのはそのためか。

浄土句集



虚子祀る比叡の塔に落椿

福岡 荒牧 還愚

評 五月初旬、羽黒山より奥の細道の芭蕉

の跡を追うて七日目に、比叡山横川の虚子塔に着いた。塔を取巻く椿は落花しきり。

著我の道嶮し高野の女人坂
東京 栗原やえ子

評 女人坂であるからやさしからねばならぬのに、著我の花咲く高野は別らしい。

鯛賞味弘法大師の縁起聞く
福岡 高良 慈風

評 鯛は筑後川のみに棲む珍魚で、弘法大

一田牛畝選

師の縁起にまつわって、捕って直ぐの船の料理は珍味。

恙なき余生楽しき更衣

東京 阪入 等達

評 健康は何よりで、授かり余生を楽しみつつ更衣して旅に出らることは倅だ。

読み耽けり傘を忘れし梅雨晴るる
埼玉 佐久間愛子

評 足弱であれば梅雨が晴れると傘は杖となるので必要だが、違者であれば。

佃煮に母なせしごと山椒の実
東京 末常てる子

山形 松田 光馨
職にあることの倅せ夏休み

福岡 上滝津弥音
古里の野路久方や青田風

京都 安藤 寛
豌豆の蔓の伸び来し蛸蛾の径

三重 山田 うた
磨崖仏老杉暗し夏木立

愛知 渡辺 杜水
参道の茂りを剪るは院主らし

東京 細田 初枝
犬吠の岩肌を囓む土用波

東京 猪瀬 幸子
雨催ひ宵宮囃遠くより

東京 真野 竜
五月雨の晴れし湖上に白帆行く

大分 丹羽 難中

天然の浜撫子を絶やすまじ

日々感謝俾せ胸に薔薇の花

東京 吉原登起子

群馬 島津 か寿
風鈴はゆうべの夢を忘れさす

信濃路の空美しき雲の峰

東京 新井 新生

ミニ鎧飾りて吾子は終戦子

東京 栗原とも子

山口 上野 明達
新装の須弥壇の香涼しけれ

新茶古茶入れ替えられし燻り壺

東京 真野よし子

好きなれば花瓶あるだけ四葩かな

山形 松田 允子

福岡 永江 隆説
長閑さや停車の車内聞く軒

筑紫路は雨すかんばの花盛

東京 小笠原香祥

七夕に娘の縁願う夕べかな

東京 吉田ゆきえ

福岡 権藤みきを
お互いに詫び合う無沙汰安居僧

白糸の滝万緑に飢して

福岡 服部 光代

田草取るひと足ことの重さかな

三重 森 静枝

福岡 行正 明弘
竿さして菖蒲手入れの舟寄する

御田植えの揃い奉仕の紺紵

福岡 高良 幸代

山吹の枝たわたわと小糖雨

東京 阪入志津枝

福岡 前田 秀峰
満堂の詠歌の舞や法然忌

梅雨晴間木の丸殿の吟行に

福岡 三牧 重利

糠漬の色芽え芽えと薄暑かな

東京 田中 秀代

福岡 釈河野ねはん
檀用の余暇を庭木の毛虫捕る

膝小僧疼痛激し梅雨の冷え

福岡 稲永 新

雨しげくしとど重たき牡丹かな

東京 鈴木 葉子

一田 牛畝
芒叢より清ぎ出せし渡舟かな

真向きの仏画像

私の寺の本尊は、善導大師直筆といわれる真向如来三尊像である。徳川家康が甲州出馬の折に二回にわたり当寺に滞在し、当寺も家康の館として武運を祈るために、真向如来を尊信し幾多の厄難をのがれたといわれる。家康が帰国の折に、真向如来の祈願は正月と七月の二度の開帳を行え、とのお定めがあり、さらには、国家安穩の祈願には精進せよ、との言葉があったという。現在でも年二回にわたって、秘仏の開扉を行なっている。

さて仏像には絵画、彫刷、石仏などがある



磯貝基教

(甲府市尊勝寺住職)

り、尊名からは如来、釈迦、菩薩、明王、天部、羅漢、高僧像、野仏などがある。仏像は人間が造ったものだから、仏像の造像技法や尊名の見分け方など美的意識のものであり、偶像そのものであるから珍重鑑賞するものだという人がある。しかしながら、私から言わせてもらうならば、仏像、作画、石仏は仏様である。仏様であるから、拝む対象となるべきものであらなければならぬ。仏教思想の具像化されたものであるから、当然と礼拝崇敬の対象となるものである。

浄土宗の寺ではどんな淋しい山奥でも、にぎやかな都会でもどこへ行っても阿弥陀仏が安置されている。『阿弥陀經』に、「その土に仏まします阿弥陀と号したてまつる今現に在まして説法したまう」というのは仏を指す經文で、浄土を成就して、そのよるこびも衆生とともにいられる仏が阿弥陀様である。この廣大無辺の大慈悲心こそ、今現在説法の阿弥陀仏である。

当寺の真向如来は、お顔のやさしい均整の

東照神君御厄除本尊 御祈願所



甲府天尊寺藏

唐善導大師御筆

——尊勝寺所藏の真向如来三尊圖像

とれた大きさに仏画像としては見事であり、拝むたびに私の心に仏が生きているといった感じで、礼拝するたびに深い感銘をうける。

私は、永い間の高校教員在職中において、関西旅行にはいつも奈良の中宮寺は行程に入られて見学しているが、五百人の大部隊の責任者として人波にもまれながら、疲れてとほとぼ歩く女学生を追いかけながらの見学であるから、ゆっくりと礼拝したことはない。しかし、中宮寺の門をくぐると、掃き清められた寺内の静けさに、ほっとした救われたようなすがすがしい感じである。その中で見る如意輪観音の姿は半眼のまなざし、うつむきかげんに腰をかけて、右足を左のひざの上に、右手は優雅にまげて指先が軽く頬にふれている思惟の姿である。やさしい微笑のまなざしのあたたか味のある菩薩に接し、今までのほこりにまみれた雑騒から抜けでて心洗われる思いである。女学生たちはただ感嘆の声を発す

るのみで、手を合わせて礼拝するものはいのは淋しいことであった。

菩薩像は概して半眼のものが多く、やさしいお顔をしており、人間の理想像の純化されたもので、親近感を抱かせるものが多い。阿修羅像は、不動明王のような怒りのお顔もある。これは仏教の守護神であるという内容が表象されている。野の仏、石仏などは技巧的でなく、野趣豊かなもので石仏や首のない野仏は興味つきないもののあわれさがある。

佐渡の相川あたりに点在する名もなき流人の墓、無宿の墓、無縁の墓の野仏は山のあちこちに散在している。

二度と来まいぞ金山地獄

来ればかえれるあてもない

何と悲しい歌ではないか。地の底から聞こえてくる苦しい叫び声のようである。いいしれぬ悲しさがあり、憐れを感じさせられる。

実は、金山奉行大久保長安の墓が私の寺に

ある。相川の江戸沢にある大安寺には長安の逆修塔がある。

さて、当寺の真向の仏画像である。この尊像はどの角度から見ても仏は必ずその視者を見つめておられるように見えるのである。もともと仏画でも仏像でも素直な心の徹底したものを表わしているのである。一般には左右相応の正面向きに写したり、彫ったりするのだが真向の仏像はとりわけ瞳の入れ方に特色があつて、万變の視者を見つめるように直面するように見えるのである。その目標は拝む人々のそれぞれの位置において、それぞれの人に相対し、今ここに、このように在り生きているという広大な心を顕わしている。

経文にある「光明遍照 十方世界 念仏衆生 攝取不捨」を表わすもので阿弥陀仏が一切衆生を救済せられる有様を説明したものである。このように阿弥陀仏の一切衆生救済のための働きかけはあらゆる人に及んでいるの

であり、この真向の仏像こそ、ひときはふさわしい仏像といわねばならない。仏が衆生救済の本願として誓われた称名念仏は、仏のみなを称えることに浄土往生を示されたものであり、これが真向の仏の真の意味である。

この真向如来は前述したように私の寺である尊跡寺の本尊仏で、唐の善導大師の真筆といわれ当山の秘仏である。

善導大師が則天皇后の求めに応じて写したといわれているこの本尊仏は、初め禁中におき後に石清水に遷し、武田信虎に伝わり大永年中に尊跡寺を創設して本尊仏としたといわれていることは当山の縁起に謳録してあるが、画幅に奥書などがないのは残念である。

信虎が難病に困難している時、真向如来の靈妙たえなるをきき深く尊信礼拝し病は速やかに平癒したと伝えている。この真向如来が国利民福をもたらす利益あらたかなるをきき知った徳川家康は、心から帰依し、東照神君徳

川家康厄除として深く崇敬礼拝したという。当山の真向三尊は阿弥陀本尊と脇侍の観音、勢至菩薩で脇侍の優美なやさしさが本尊仏を一層けだかいものに高める役目を果たし、美しい調和美を形成している。

善導大師の真向如来直筆について考えると、大師は『阿弥陀経』を写すこと数万巻といわれ、数多くの仏像仏画をえがき、これらを携帯して、みずから修行したり、人をも極楽の莊嚴を觀じさせたりした宗教家であり大芸術家でもあり、長安の民衆教化につくされた功は大きい。阿弥陀仏を本尊として莊嚴された長安の浄土堂は有名であり、こんなことから当寺の真向仏も善導の作としてまちがいないと思う。

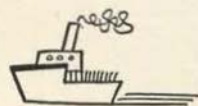
とにかく真向きの仏像は、その名の如く、一切の衆生を攝取して捨てずの広大な慈悲の表わされた仏像であることを述べたいのである。

絆きずな 【四】

— 栄光の青春・失意の青春 —

森もり 邦くに 夫お

(町田市福祉懇談会座長
町田市ボランティアの会顧問)



何回かに涉って『絆』と云う字句が持っているたいへん重要な意義について話をして見たが、なかなか語りきれぬテーマではない。

前号にも書いたとおり、古字で絆と云う字を『継』と書いた時代もあった。

御承知の通り、わたし達が日常に用いている言葉を現わすその字句は、その一つ一つに、まことに尤もな、深い意味を持っているものだが、たとえば『偽善』と云う言葉を分解してみると、人の為にする善は真の意味での善ではないとしているが、まことに穿うがった言葉で、人間

に対する手きびしい教誡をこのたった二つの字句が秘めている。人として、しなければならぬことをするだけのことで、意識的な善行であっては本ものではない、と云う警句なのであって、仏さまの衆生済度、苦海にある衆生を済すくい永遠の至福である常楽彼岸(涅槃)に渡わたらせること、この尊い仏さまの意こころ、この意識からのみ本当の善は見出されるのであって、善行とは、ことほどさように純度の高いものである。

話が横道にそれたが、古字に書くところの『継』とは、読んで字の如く『世の中の糸』と書くのであって、断つ

に忍びない恩愛の情のありさまを、この一つの文字に表わしてあるわけなのであって、『眼光紙背』などと云う言葉があるが、書物を読んで、その字句の解釈だけにとどまらず、その書くところの奥の意味、深意に徹底しなければいけないと云う意の言葉だが、まったくその通りで、文字の一字一字にも留意おこたりなくする心がけが大切で、この心がけが、文字を正しく解釈し、ひいては世の中すべての事象を見誤らぬことにもつながるのである。

世の中の糸と書いて継と云う。

親子の継、兄弟の継、師弟の継、夫婦の継、社会と自分の継、人間と他の動物との継、ふるさとと自分との継、この世の中は、すべてこの継で結ばれているのである。

度々、云っているように、わたし達人間社会はすべてが複数で成りたち、恩愛の情を、愛のよろこびを、別離の悲しみを、この複数の型の中で味わい、善び、悲しみ、怒りながら暮らしている。世間と云う言葉も、そんな意味を内蔵してできた言葉なのである。

だから、この大原則を否定したらわれわれの人生も、個人の生活も成り立たないのだ。

ある相愛の男女が結婚する。善びも、悲しみも、又、苦しみもその結婚生活の中にはあることだろうと思う、しかし、そうした感情を味わうことが出来るのも、すべて他人を媒体にしてこそこのことで、それがたとえ、どんな型式にしろ相手のない自分だけの生活などはこの世の中では考えられないことなのである。

そして、それらの事はすべて、目に見えない因縁の糸でつながっているのだと云うことを忘れてはならないのである。

薄幸の歌人、石川啄木の歌に、

汽車の窓

はるかに遠くふるさとの

山見えくれば襟を正すも

と、この幸せ薄かった天才詩人啄木のふるさとを想い、忍ぶ切なる心情が、厳肅な感傷の中で、切々とわたし達の胸の奥は迫るものを感じるのである。

生まれ育ったふるさとの山や河は、丁度、母親の血の肉のぬくもりのように、強い強い絆となつて、いつまで

も啄木の胸の内に息づいていたのである。

x x x

どしゃぶりの雨の東名道をわたし達を乗せたバスが太坂へ向けてひた走っている。

真夜中のことで消燈されているバスの中も真の闇だし、車外もどしゃぶりの雨の為に真の闇である。

わたし達と一緒に出発した数拾台のバスも今は見当らず、真夜中のどしゃぶりの雨の東名道は孤独である。

球児達の三年間の血のにじむような努力の成果を見守ってやるために、このバスは、今熱烈な後援者達を乗せて雨の東名道をひた走っているのである。

知人の息子の応援の為にと云うより、一年に一度見られる『一球入魂』の真剣勝負を見たかった為と云う方が当たっている、高校球児の火の玉のようなほとばしる情熱に接しなかったからの甲子園行きだったのである。

決勝戦の結果は、知人の息子が在学している横浜高校の優勝で幕を閉じたが、勝ち負けは別の問題として、いんな意味でわたしは毎年夏に行われる、この行事が大好きである。

監督と球児達の親子にも勝るとも劣らぬ血のつなが

り、そこには『一球入魂』以外なものもない極めて純度の重い精進あるのみである。

おそらく、どこの高校でもこの黒については変りはないかろうと思う。

『栄光の青春』に向って、火の玉のような訓練が、監督を含めた球児達の純度の高い精進の毎日なのだ。それは、火の玉のぶつかり合いであらうと容易に想像される。ピントの二ツや二ツはへでもなからうと思う。

これがなければ栄光の青春などかち取れるものではないと思う。

激励の鞭であって、強い愛情が内に秘められていることを忘れてはならない。

監督にすれば、自分の子供のように可愛い球児が、なんで、憎い筈があるだろうか。

ある学校では、監督のスパルタ訓練に問題があったとして、PTAに負け、マスコミニューケーションに牛耳られて、球児達の積み重ねてきた血と肉の貴重な精進を無視して、この少年達の希望を一時にして失意のどん底にたたき落した。

憎みても余りある大人達のファクションである。

総員罰こそ、戦争の名残りの制裁である。

栄光への青春を一時にして失意の青春にかえてしま
う。

家庭にしても、学校にしても、社会にしても、その罪
の大きさを知らなければいけない。

ある意味では、監督と球児達の、その間柄こそは、親
子の間柄よりも、もっと強靱な恩愛の絆で結ばれている
のだと思う。

ある地方では、失員の部員が非行に走ったとも聞い
ている。

まことに、劣ろかな、そして悲しい結末ではなからう
か。

獅子は千仞の谷に、その子を落として、試練すると云
う。

骨なしの男児を作り出す要因は、いつも、必らず大人
の側にあるように思われるのである。

私は紫陽花が好きだと、何号か前の『浄土』に書いた
ことがある。

ユキノシタ科のこの落葉灌木は、もともと海岸に自生
したが、六、七月頃に球状の集散花序を見事につけ、集

合体の美しさと立派な整った秩序が集合体には必要な要
素であることを、わたしちに教えてくれていること
で、大へん好きな花なのだが、チームの和と秩序を大切
に監督を中心に乱れることなく精進して、やがては美し
い技を身につけて開花する、高校野球も亦、紫陽花に負
けぬ美しい花をグラウンドの上で開花するのである。

大人の勝手な考えから、子供の希望を画餅に帰するよ
うな無思慮は強い反省の中でつしまなければいけない
だろう。

大人達のこんな無思慮、無分別が、よく見かける、酔
生夢死の人間を作りだしてしまう。

希望を失った生涯ほど寂しいものはない、こんな子供
達を創らないようにすることは、わたし達の責任だし、
親達の義務であることを強調しておく。

× × ×

少年易老学難成

一寸光陰不可輕

未覺池塘春草夢

階前梧桐已秋声

若いわかいと思っっているうちに、あつというまに年をとって老境に入ってしまったのが人生で、それにしても学問はなかなか進まない。だから、若いうちから時間を大切にし、勉学に励むべきだと云う意味で、わが国の江戸時代の儒学に大きな影響を与えた「朱子学」の開祖である南宋の朱熹の「偶成」という詩の一句で洵に示唆に富んでいる。とくに後半の二句は、ときのたつ早さを比喩的に表現している。

学問に就いてもそうだが、人生万般に通じる詩句で、目標を達成する為めには雑事や誘惑に負けることなく自

◆ 法然上人鑽仰会創立四十五周年記念式典のお知らせ ◆

昭和十年五月一日に、『浄土』五月創刊号の第一巻第一号を発刊してから、法然上人鑽仰会の足跡はすでに四十五年を越える歳月を積みしてきた。『浄土』誌も今年は四十六巻目に入り、小冊子ながらたゆまぬ前進を続けているのである。

そこで、今秋十一月八日(土)、東京・田町の笹川記念会館において、法然上人鑽仰会創立四十五周年

分の目的に向って邁進せねばならぬと、若い人達に警告している。

青春は二度こない。まことに早く立ち去ってしまう。

君の青春を栄光の青春にするのも、また、失意の青春で泣くのも、君自身の努力と、そして精進がきめる。

青春は二度とこない。

あなたの宝ものだ。

悔いのない、充実した努力と精進の青春がやがて君の将来を招くことになるのだ。

(完)

記念式典を催すことになったのである。式典は座談会や左に掲げた森爽氏主宰の「月影会舞踊団」の特別バレー公演「二河白道」の上演をメインにして、半世紀近い法然上人鑽仰運動の歩みを振り返り、新しい展望を開きたいのである。なおこれに併わせて、善導大師一三〇〇年ご遠忌と法然上人誕生八五〇年のお待受けの慶讃を営むつもりである。

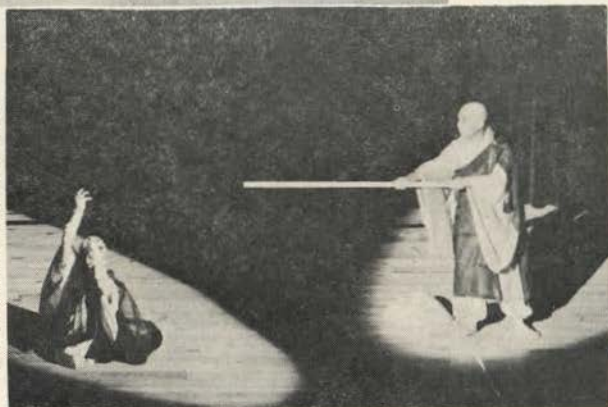
— 肉屋「京」に念仏を説く善導 —



— 二祖対面 —



— 苦悩の法然に白道を示す善導 —





念佛ひじり三国志 (主)

— 法然をめぐる人々 —

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

おんぼうさま——髭づらの猟師ふうの男は、住蓮をおのれの罾(ねぐら)へ誘った。山崖へ丸木をさしかけ、杉皮や乾し草を屋根にした文字どおりの草庵だった。四囲の壁は、所狭しと吊るした猪や鹿などの皮で代用していた。ために庵内には獣の生き血の匂いがむんむんと立ちこめている。

それでも奥には仏像がまつられていて、山ひじりの棲み家らしく取りつくろってあった。

仏像だが、一体ではない。大小取りまぜておびたしい数の仏が、崖を削った即製の棚に並べてある。どれも粗末な出来で、仏師などの手に成ったものとは思われなかった。

「これは、みな阿弥陀像か」

住蓮は念を押さずにはおれない。草庵の主が念仏ひじりらしいので阿弥陀如来にはしたが、正直な印象は何ら得体の知れぬ異相像の群れだったのである。

「うむ……出来の悪い阿弥陀さまであろうが」

悪いも良いも、まるで成っていない。

「おぬしの手彫りか」

＜髭づらの獵師＞



前号のあらすじ

法然浄土教の展開の中で、安楽・住蓮の事件は、専修念仏の教団が蒙った最初の法難であった。もともと安楽房遊西には、専修教団のあり方に対する考え方やその行動に激しい熱意であり、そのことが一つのかたよりと暴走を引き起こす要因でもあったかもしれない。しかし、安楽・住蓮の「六時礼讃」の密修ということが、鈴虫・松虫という後鳥羽院の女官を巻き込んだ背景には、後鳥羽院政の不思議な対立があったことはつねに京都方と鎌倉北条方との政治的な対立があったことはいうまでもない。

時雨沢——洛東のこの小さな谷合いこそ、「六時礼讃」の美しい調律がはじめて生まれたところといつてよい。その勢至堂で、住蓮は念仏の新しい模索を若い情熱に込めて試行錯誤していたのである。

「これで、な」

と、山ひじりは塩漬けの猪肉を突き刺した山刀を住蓮の鼻っ先へちらつかせた。

もっと食べ、とも取れる。

これは草庵へ坐りこんでから、こまめにくり返されてきた一連の動作であった。山ひじりは住蓮を精いっぱい饗応しているつもりなのだ。

しかし、猪肉はめっぽう旨かった。それも酒のおかげ

であらう。

粟を醸した手造りの山酒だ、という。茶黄色にドロついてはいたが、ふくむと舌先に甘味が泌みて、塩っ辛い猪肉と具合好く調和してくれる。

「この刀で阿弥陀仏を刻むのか」

「ほかに道具は何もないわ」

「粗木からの……」

「一刀彫りよ。出来は悪いが、いろいろな人柄がしのばれて面白からう」

「いろいろな人柄？」

「如何にも。阿弥陀仏の大慈大悲はさまざまな人間をお救い下さる。貪慾な奴、淫らな男女、嘘つき、しわんぼう、権勢慾にとり憑かれた野郎、狂信者、残忍な悪党……阿弥陀さまの側でもいろいろなお顔で接してくれなければ困るじゃろ。何せ相手は盲昧無頼のやからだでのう」

煩惱の多種多様性は理解できるが、どの木像も「救って下さる」という有難いお顔ではない。目鼻立ちはいびつにゆがみ、口もとがぼっくり開いていたり、下卑た「へ」の字に結んでいたりする。

ただ一点だけ……と、くり返し眺めまわしているうちに住蓮は気づいた。

共通した部分がある。大胆な曲線でクマどられた領域を、どの阿弥陀像もが保有していたのである。いや、この曲線があったために小ささまざまな仏像群を、同一の阿弥陀仏と言いつてあてることが出来たのであらう。

「お目の周辺が、面白いな」

住蓮は首をかしげながら声を洩らした。共通した「異相」ぶりもその大胆な曲線から由来していたようである。

「わかるか」

「わからないが、どことなく面白い」

「あそこだけは苦心し、念入りに刻んできたのだぞ。ほかはどうなっても、かまわんのだ」

山ひじりは自信満々である。

俗に「柳眉」と呼ばれる部分だった。まつ毛と瞼が接する領域が、大胆な数本の曲線で浮き彫りさせてある。一見、無茶苦茶に目つぶしをしてしまったように見えるが、どぎついクマ取りの間から眼光に似たものすら感取できる。

きびしい威厳と、妙な暖か味をふくんでいる。曲線の魔術であらうか。

「あそこだけ、血がかよっている」

「生きておるか」

「うむ。不思議に光り、揺れるように見える」

彫刻の技術を全く持ち合わせていないはずの山ひじりが、信仰を基軸とした感応と思案から発した曲線なのであろう。現代流で言えば造型化——デフォルメーションである。

「光って、揺れておるだけか」

山ひじりは訊きかえしてきた。

「わたしには、そう見える」

「人が、仏が、光って揺れる顔、それは笑いだぞ」

「笑いか……」

「微笑じや。微笑三昧じや」

「うむ……」

「この世に棲む鳥獣すべての生き物のうち、微笑の顔を持ち合わせ得るのは、人か仏しかおらん」

「猿の微笑は聞いたことがない」

「じゃろう？ 微笑する人間の顔。それが仏の化粧とい

うものじゃ」

山ひじりの言葉には妙な圧力があつた。

学殖や見識の深さ高さではあるまい。信仰の純度と生活体験の豊饒が彼の言葉に重量を加増するのであろう。住蓮たちが近ごろ何処かへ置き忘れてきた生きる熱源、とも言えた。

おんぼうさまは、陶醉にひたる眼で手製の仏像群を眺めやっている。

この時期より遙かあと、江戸時代に至ると円空や応其らの彫仏ひじりが出現してくる。山中にこもり、木の芽を食し、仏像を一心不乱に刻むことで悟達の境地を求めた。おびただしい数の木像群を山中へのこした。作品の出来ばえよりも彫仏それ自体に信仰実践の精華がある、と信じた。

しかし、この彫仏行はこれら有名ひじりによる独創ではなかったはずだ。すでに長い年月を経て伝承されてきたもののようであった。

円空や応其よりさらに後期、甲斐の木喰五行は彫仏行に常住の世界を発見している。

彼の前半生は不詳である。十四歳で故郷丸畑（山梨県

西八代郡)を出奔、江戸に出て俗業を励むが二十二歳で出家、以来諸国をめぐる漂泊僧となる。四国八十八カ所の霊場はわが庭の如く、遠く北溪の地松前から西端の長州萩、馬関にまで及ぶ。

ようやく故郷丸畑村へ戻ったのは八十三歳の晩秋、寛政十二年(一八〇〇)十月末だったという。しかしこの日が修法のゴールではなかった。故郷に草庵を結ぶと老軀に鞭打って千体仏の彫像にかかるのである。

四国どふ(堂)菩提の道は遠くとも

近道みればなむあみだ仏

千体仏は齡九十にして遂に成就した。しかし木喰五行はその翌日から二千体仏の希願を発している。

二千体仏は成らなかつたようである。九十三歳の文化七年の六月初五日、示寂した。

——木喰五行円満聖人

二

聖人。

ひじり、である。

自らは木喰五行菩薩と記しているが、彫仏行へ没入しはじめると「聖人」を呼称したらしい。

念仏ひじりの面目躍如たる歌が幾首も遺っている。

木喰も道には迷ふ腹は減る

今宵は此処からの断食

不喰もいづこのはてか、往き倒れ

犬か鴉の餌食なりけり

木喰の遺品(かたみ)なくともなむあみだ

かえすがえすもなむあみだ

木喰も冥途の旅に伴れもなし

戻りてみれば塔婆一本

仏とも鬼とも蛇ともわかねど

何になろうとなむあみだ

現代にのこる木喰仏には統一した「線調」がある。独特な曲線である。

これは彫像の技法上からも固定した様式化に役立っている。つまり一刀彫りであって、粗木を削り落してそのまま仏像とする。そのためには単調な「線」が固定していない巧拙にわかれる。また速成量産にもつながらない。千体仏が短期間に成就できたのも、この固定した様式化であらう。

仏像の体線だけではない。木喰仏の特色はその相好に凝集する。どの仏、菩薩にも共通した表情がある。「微笑」であった。自然にこぼれ出ている笑いの顔であった。

異妖で大胆な曲線が、仏徳の極である「拈華微笑」を誘いだしている。しかもこの曲線、決して難解でも繁雑でもない。習熟してしまえば、いとも易々と彫りおこすことができるであらう。

木喰五行の九十年の生涯、彼のひたむきな修法求道に減点を与えるつもりはないが、彼一代でこの「線調」が創造されたとは、どうしても思えないのである。

現に、有名無名の木食仏、円空仏のなかにわれわれは酷似した微笑仏を発見する。鎌倉期の野仏にも多い。長い時間の伝承と、多くの山ひじりたちによる技法精進の集大成と考えたい。

ところで建永二年末、霊鷲山の山腹にさしかけられた草庵にいる住蓮と山ひじり。

山酒にも飲み飽きたか、山ひじりは立ち上がった。

「もっと出来のいい観世音を見てもらおうか」

「此処にはないのか」

「この先だ」

山ひじりは草を掻き分け、山崖を登りはじめる。

「おぬしは根っからの狐師か」

「根っからの、はあるまい。生まれた折はハダカの赤子じゃ」

「先刻の説法ぶりなぞ、鳥獣相手だけとは思われない」

「三昧堂にいた」

ぼつきりと言った。

「山のお堂に籠もったことがあるのか」

「籠もったも何も……一期きっかり十二年間も勤めあげたわ」

＜比叡山西塔・常行三昧堂＞



「いっぱしの堂僧ではないか」

住蓮は山ひじりの髭むじらな顔を覗きこんだ。修行僧の面影なぞ微塵もとどめてはいなかった。

山のお堂——常行三昧堂を指す。比叡山の西塔にあつて、常時に修行僧がいた。堂僧と呼ばれた。

常行三昧堂での修法は、なまさかな「行」ではなかった。回峰行と並んで比叡山における二大難行とも言われた。

この籠山行は、他界から隔絶され、断食、不眠不休などあらゆる体苦を自己に強いられた。

九十日、身に常に行（あゆ）んで休息することなく、九十日、口に常に阿弥陀仏の名を唱えて休息することなく、九十日、心に常に阿弥陀仏を念じて休息することなかれ……なのであった。

残余の日々は坐して経巻をひもとく。

これらを十二年間くり返して、ようやく「二期」の修法が完了する。

殿ノ比叡ノ山ニ堂僧ツトメテオハシマシケルガ、山ヲ出デテ六角堂ニ百日籠モラセ給ヒテ、後世ノ

事祈り申させ給ヒケル。九十五日ノ曉ノ御示現：

……

と、恵信尼は娘の覚信尼に書き送った消息（書信）の「裏端書」である。殿とは言わずと知れた夫親鸞のことで、明確に比叡山で堂僧を勤めていた前身を告げている。その堂僧も後年の念仏への打ち込みよりから常行三昧堂だったと推量できる。

その親鸞だが、恵信尼の書信は冒頭で、比叡山を下山し六角堂参籠の九十五日目、観世音菩薩と聖徳太子の示現を得て、

後世ノ助カランズル縁ニ遇イマイラセント、訪ネ

マイラセテ法然上人ニアイマイラセテ……

と吉水の禅室に法然を訪ねた経緯をつたえている。

堂僧の説明に紙面を費やしたが、この時期、比叡山の常行三昧堂で難行苦行に励んでいた堂僧の何人かが下山をし、法然を慕って易行念仏へ転身していった事実を裏付けたからである。

当時、常行三昧堂は西塔のほか横川（よがわ）にもあった。法然自身もみつしりとこの籠山行を修行しつくしていたのではあるまいか。でなければ、親鸞のような追慕者が現れるとは思われない。

「なぜ、山のお堂を捨てた？」

住蓮は山ひじりに訊いた。追究の口調になっていた。

彼自身にも漠然とではあるが、籠山行のきびしさへの畏敬と憶がれはあったのである。

「わしは十二年、念仏を唱え続けた。阿弥陀のお姿を念じ、思いえがいた」

「お姿が、現前し給うたか」

「現前し給うた。しかし……」

「しかし、何だ」

「あまり親しみのこもったお方ではなかった」

「……」

二人は足を停めて、どちらからともなく空をふり仰いでいる。日輪はだいぶ西へ傾いていたが、未だ光りは空の隅々までうつし出す余力を残していた。

「わしはな、ある夜、現前し給うた阿弥陀仏へ手をさしのべてみた」

「手をさしのべたのか」

「そうだ。すると、阿弥陀さまも手を握りかえして下さった。その手ざわりなんだ」

「手ざわり？」

「冷めたいんだ。氷のように冷めたいんだな」

住蓮がうかがい知ることのできない場面かもしれないかった。彼は十二年間も孤独に、虚空の世界でだけで、阿弥陀如来と対決しようとした経験はない。

「なぜそんなに冷めたいんだろ」

「わしも考えた。大慈大悲の如来さまが、なぜこんな手ざわりなのか。ようやくわかった」

「どうわかったんだ」

「この冷めたさはな、修行者のものだ」

「修行者のもの……」

「うむ。三昧僧という俗界を離れてしまい、専門に仏だけを念ずる修行者へこたえてくれるためだからだ。此方が冷めたい心で立ち向えば、先方だって硬い姿勢で応じてくるだろうよ」

「それで、下山して、彫仏をはじめたのだな。仏の暖かい手を求めて」

「四角ばったお顔の仏では、救われた気にならんだろうが」

稚拙な技法をかえりみず、山ひじりは微笑仏を刻むことで新たな三昧行へ没入した、というのである。

三

尾根が切れて、なだらかな窪地がひろがった。そこには喬木がものやわらかい風情で立ち並んでいる。

山ひじりは話を続けながら雑木林へはいっていった。

「何せわしは、猟をして鳥獣は殺すわ酒は喰らうわ、時には女も抱くわで、山のころとはまっさかさまに暮しておる」

「女も抱くのか……」

住蓮は昨夜来の不思議な体験を思いかえしてみる。時雨沢の山姥と、今朝焼かれた死体は同一人の人物だったのであろうか。とすると、自分は死霊と婚ったのか。

「こちらから求めて抱くことはせん。しかし、無聊な山中じゃ。抱かれない女も何人かおる。応じてやらねばならぬわい」

「抱かれない女か」

死を間近に迎えようとする山姥の慾念、それは異性に最後で抱かれてみたい願ひだったのであらうか。

「そんななかに現前し給う阿弥陀さま、やはり肌ざわりは暖かいな……おい、法然さまがおっしゃる弥陀の救いも、それとちがうか」

「さあ……」

俄かには断じきれなかった。

山ひじりは雑木林の中ごろまで進むと、一本の立ち木の前で足を停めた。

「これだ」

「ほほう、見事なお立像だな」

等身大の木像が立っていた。細おもてで、顔はあの仏像群と同じように微笑していたが、肩や腰の線がなだらかで、まさしく容姿端麗であった。

山ひじりが自慢するように、出来ばえは抜群だ。

「犬ころのような手足ではないな」

住蓮はぐるり立像をひとめぐりした。お尻の部分には、はっきりと双つの丸味を盛りあげた線まではいっている。

「どうだ。この仏、男と思うか、それとも女か」

尻をあらためた住蓮は、足がかさなり合う身体の前をあらためた。そこは、のつべら棒になっており、性別をあらわす刻みの跡はなかった。

「身体の線は女のようにでもあるし……しかし、おぬしにしては出来すぎている」

「出来すぎも足らぬもないわ。立木そのままだからな」

「これ、立木だったのか」

「そうよ。梨の木じゃ。枝を払い、頭を切り落とし、あとは削り取っていただけじゃ。見事さは、わしの腕ではない。立木の精が、そのまま端麗な容姿になっていたわけじゃ」

「男か女か、と問われたが、これは美形の衆童だ」

「さすがは眼が高い。何をかくそう山の童子を思い浮かべて刷んだ」

衆童——稚児である。

この山ひじり、堂僧だったころ、ひそかに思いを寄せた稚児がいたであらう。だからこそ尻の線が、妙になまめかしかったのか。

山ひじりはひとしきり比叡山にいたその衆童の美形ぶ

りをしゃべったあと、

「この梨ボトケにぞっこん惚れこんだ女がいてな、朝な夕なにお参りしよる。やたらと頭から酒をぶっかけてな」

と、話をひろげた。

「仏に酒をかけるのか」

「お顔の光沢もその酒のせいだろう……そうだ、その女とはな、今朝のオババじゃ」

「みんなして火葬にした山姥……昔は名のある白拍子とか」

「おぬし、ようおぼえておるのう。そうだ、あのオババだ。それが、どうかしたか」

山ひじりは住蓮の眼を覗きこんでくる。

「いや、臨終（いまわ）に舞いさしたという今様の文句が忘れられんでな」

仏も昔も人なりき

われらも終には仏なり

呟きながら住蓮は、自分の手枕へ顔を横たえた山姥の

深いまなざしを思いうかべている。あたかもいま眼前に

立つ梨ボトケが、彼女そのものに見えてきてならない。

「オババは言うとったな。この美男におわす梨ボトケ。男にも女にもしないで欲しいとな」

「うむ……」

その心情は住蓮にも突き刺さるように領解できた。

老若男女——あらゆる差別を超えて、老姥は永遠の愛のなかで生き続けたかったにちがいない。それこそ、仏の限りない命ではなかったのか。

「わしはな、あのオババを抱いたことがあるぞ」

山ひじりが、いきなりサメた口調になった。

「いつごろ……」

「なあに、つい先ごろのことよ。この梨ボトケの下でな」

「抱かれないとオババが望んできたのか」

「いいや。このときばかりはわし自身のどうしようもない慾望じゃ。オババがな……」

熱心に梨ボトケに向って経文を誦していた。しゃがみこんだそのうしろ姿が、たまらなく挑発的だった、と山ひじりは告白する。

根掘り葉掘り、その情事の聞き出そうとする住蓮の姿勢には幻想を現実化したい意図がこめられていた。

しかし、山ひじりの情事描写はきわめて散文的であった。突発した欲情で老姥を手ゴメにしかかったが、万事が不調だった、というのである。

「もはや、あのオババ、女ではなかったわい。枯れ枝みたいな身体でな」

「……」

意地悪い眼で、住蓮は山ひじりを見つめた。

欲念だけで彼女を抱こうとしたからだ。そこにはやはり猟師という殺伐な生活が背景をなしていたのである。欲念の対照だけだったら、彼女は無機物の枯れ木にちがいない。

住蓮は自分が昨夜体験した幻想の世界にある種の誇りと、それ以上に深い陶醉をおぼえる。

やはり、自分とあの老姥との間には、見えぬ網で結ばれた強い関連が実在したとしか思えなかった。

住蓮は軽い足どりで霊鷲山を下った。

たしかに昨夜来の体験は、かって身におぼえたことのない異妖夢幻の世界だった。その恐れととまどいが、山

ひじりの別れぎわの告白で一氣に浄化された思いなのだ。

老姥を、一個の女体として扱った山ひじり。自分にふれた彼女には幻影の虫惑といつくしみがあつたではないか。

山ひじりが感知し得なかった「愛の精」にふれ得たことになるのである。住蓮の胸は濃厚な美意識でふくらんだ。

今夜は清水堂へ参籠し、老姥の霊を弔うことにしよう。

観音堂の下まできた。石橋を渡りかけたとき、背後から呼び止められた。

「信国——」

すでに遠く置き去りにしてきたはずの住蓮の俗名だった。

「えっ……ああ母上」

石橋の袂に、ふたもとの桜が寄り添うように立っていた。そのかげから走り出てきたのは住蓮の生母朝子であった。

京七条に住み、すでに齢八十になんなんとして静かに

余生をすごしている。ここ数年の間、絶えて会っていません。

「お前にひと眼、逢いとうなって」

「母上、なぜこんなところにまで、わざわざ……使いを寄越せば七条へ参上しましたものを」

「この人が」

と老母はかたわらに立つ少年を指示した。彼女をつれてきたというのである。

「一度、お前からじかに礼讃を教えてもらおうと思うてな」

しかし、住蓮に母の言葉は届かなかった。彼は全身が氷りついたように、表情をこわばらせ、少年を凝視しているのであった。

瓜二つ……いや、そのまま歩き出してきたように。

そこに立つ少年は、あの梨ボトケそっくりではないか。

(つづく)

村瀬 秀雄 著

|| 新刊 ||

『和 訳 善導 六時礼讃』

B 6 判 二六五頁 価二四〇〇円

|| 好評 ||

『和 訳 善導 観經四帖疏』

B 6 判 五八四頁 価三五〇〇円

『和 訳 法然上人 選 択 集』

B 6 判 三八七頁 価二五〇〇円

『和 訳 淨土三部經』

B 6 判 四七四頁 価二五〇〇円

取扱い 法然上人鑽仰会

二 編集後記 二

○本文中にもお知らせいたしましたように、法然上人鑽仰会創立四十五周年の記念式典が、色々な催し物の豪華企画をとまなつて、来る十一月八日(土)午後一時より、東京・田町の笹川記念館で行なわれることになりました。併せて、善導大師千三百年遠忌慶讃と法然上人誕生八五〇年お待受記念をも標榜して、できるだけ盛大な楽しい記念会にしたいと思っています。法然上人鑽仰運動が昭和十年に発足してから、戦中、戦後の様々の遍歴を経て、月刊機関誌『浄土』を念仏信仰の灯としながら、微力な努力と精進を積み重ね続けて、すでに四十五年、およそ半世紀に近い歳月が流れ過ぎたわけです。もとより、こうした営みも、鑽仰会会員諸兄の、いえば『浄土』誌愛読者諸兄の、全国各地からの暖かいご支援と心優しい励ましによって、はじめて可能となった足跡です。この尊い足跡を銘記

し、一九八〇年代の新しい時代に向けての誠心誠意の努力の誓いをいたすために、十一月八日の晴れの会を企画したわけですが、どうか日頃より念仏信仰に心を寄せられる皆様方の暖かい重ねてのご後援を得て、来る式典を無事に成功させていただければ幸いです。この誌面をお借りしてどうぞ、くれぐれも宜しく願います。改めて切にお願い申し上げます。

○ところで読者諸兄の励ましのお言葉やお叱りのお言葉も、『浄土』誌充実の真の糧として、編集に携わる私には大変ありがたい感激であります。先般頂戴した広島市在住の高松繁夫氏のお便りには、『浄土』の内容が、「我々学のないものには皆目わかりません」とあり、編集上の工夫として、もう少し平易で、簡明な文章を掲載して欲しいとのご要望がありました。ともかく、こうした一つ一つのご助言を大切にして新しい時代や人々に向け、信仰の真実を誠意を尽して問い続けて行くつもりです。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、五〇〇円
(送料不要)

浄土 四十六巻 九月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十五年 八月二十五日 印刷
昭和五十五年 九月 一日 発行

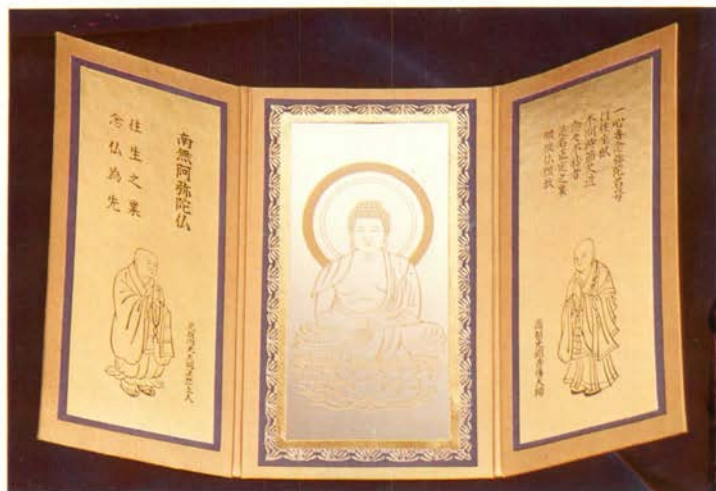
編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四番
振替東京八一八二一八七番
〒103

=好評発売中= ^{ねん}念 ^じ持 ^{ぶつ}仏



○お在家の方々の中には、ご仏壇をお持ちでも、阿弥陀如来をおまつりしていない方、お位牌だけおまつりしている方が意外に多いのではないのでしょうか。この様な方々のために、仏壇用として念持仏を謹製いたしました。中央に阿弥陀如来、左右に高祖善導大師、宗祖法然上人の尊像をおまつりした携帯にもお手頃な仏様です。この念持仏は、中央が割れない特殊な鏡になっているのが特徴です。日々夜々、心の汚れを鏡の面に写して反省しながら、浄土の信仰を深めて下さい。どうか多くの人々の魂棚におまつりしていただくことを切望します。

定価 一体 2,500 円 (五十体以上は一割引)

送料 一体 200 円 (五十体以上は無料)

●寸法 21.8cm×14cm 3枚折・実用新案登録済=番号53-044860号

(発売元) 〒153
東京都目黒区目黒4-16-12

株式会社 泰 童
TEL (03) 711-6006

(取扱い) 〒102
東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人鑽仰会
振替(東京)8-82187番